

この学校にわたしたち

2022. 06. 17 N016

目の前の子どもを喜ばせたい…



『ぐりとぐら』という絵本をご存じでしょうか？現在では10か国語に翻訳され、世界の子どもたちにも読まれている話です。私はかつて勤務した学校で夏休みに地域の方が児童に開いていただいたお菓子作り教室に参加しました。その時にこの本に出てくるケーキ作りを通してこの絵本や作者のことを初めて知りました。作者の中川李枝子さんはもともとは保育士としてスタートを切りました。目の前の園児を喜ばせたい…この思いで『ぐりと

ぐら』を書かれたといわれています。

私たち小学校の教員は、みな「子どもたちに授業を通して目の前の子どもに学ぶ楽しさを伝えたい…友だちと過ごすことの楽しさを伝えたい…」そう思って日々、授業の計画や準備を重ねています。私も担任の頃は毎日、そうやって考えていました。「目は心の窓」とは心理学者アイゼンク・Hの言葉です。うまく、いくこともいかないことも様々ですが、教師がそうやって毎日、「目の前の子どもたちを喜ばせたい…」と書いて子どもたちと関わっていることは必ず子どもたちに伝わっている…そう信じています。さて、私は目の前の子どもを喜ばせるために…校長としてできることを考え、取り組んでいきたいと思ひます。

「いつでもくるわな」

朝、8時頃と20分休憩時間、子どもたちに校長室を開放しています。普段からここで子どもたちと他愛もない話をするこゝで子どもたちの生活や気持ちを感じたいからです。「校長室のソファ、冷たくて気持ちいい」という正直な子どもの言葉に嬉しく感じます。だから、「きちんとすわります」など子どもたちが安心して校長室に



こられるためにも禁止ルールはありません。私はこゝで子どもたちといろいろな話をする時間が何よりホッとするとともに楽しく感じられます。先日、1年生の子と話して、『自分の名前の「あ」と「う」という文字は習ったよ。でも、「ふ」はまだだよ。』と国語でのひらがなの学習について教えてくれました。休み時間が終わって「また、来てね」というと「うん、またいつでもくるわな」と元気に言って帰っていきました。子どものこの純粋な言葉・心がいつまでも輝き、決して曇ることのないよう、私たち大人が大切に見守っていかねければいけないとあらためて思ひました。